

# カトリック 仙台教区報

2004年1月4日 No.155

発行  
カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町1-2-12

Tel (022) 222-7371 Fax(022)222-7378

発行責任 広報委員会

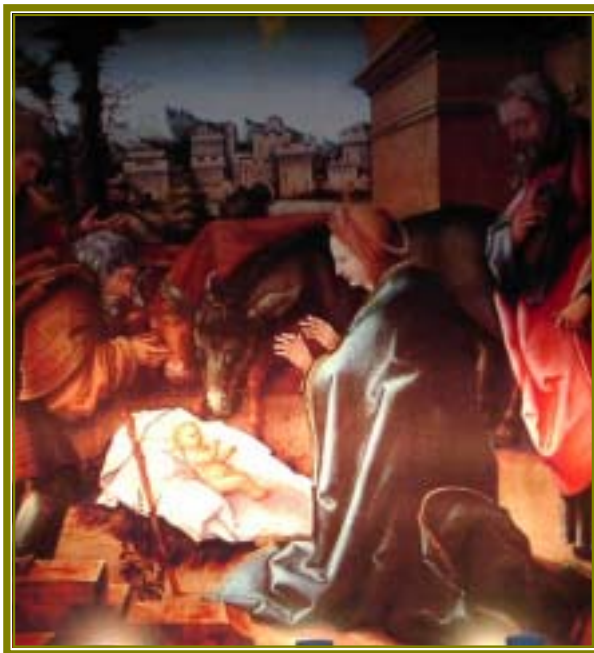
URL ; <http://sendai.catholic.jp/>

## 「天地は過ぎ去るが、 私のことばは過ぎ去らない」 新年に思うー

仙台教区 司教 溝部 脩

11月から12月にかけて、教会は暦年の典礼を通して、私たちに終末ということを思い起こさせています。基本は、私たちが生きている世界は永遠でないということです。喜びがあり、悲しみがあり、誕生があり、死があり、戦争があり、地震があり、台風が襲いという喜怒哀楽の人生の一連の出来事は、人生の何たるかをしかと思ひ起こさせてくれます。

「天地は過ぎ去る」とはまさにそのことを言い表しています。ただし、「全ては空しい」とのみ慨嘆している訳ではありません。全ては過ぎ去るという視点から人生を見直せと言っているのです。人間はとかく目の前の出来事のみにとわかれて、そこから一歩も抜け出ることができない



「羊飼いの礼拝」 ブルクスマイヤー・ハンス

るものはイエスのことばなのです。その時多くの出来事は怒涛のよつに私たちを襲い、戸惑いを与え、たじろがせます。それでも、それらは私たちにその時々を選択、決断を迫るのです。その時にイエスのことばにそって決断し、選択すること、ここに大きな意味があるのです。イエスのことばによって選択したこと

いるのです。あと10年たてば、今これしかないと思つて悩んでいるそのことは何のこともでもないという事に気づくでしょう。「しかし、私のことばは過ぎ去らない」と聖書は続きます。流転、変異の世界にあつて、私を立たせ

つつ決断することは神の前に尊いのです。年頭にあつて、また今年も起ころであるう様々な出来事の中に、しっかりと神の手を読みとつていく信仰の恵みをお願いしたい。

### 塩と光

年頭にあつて「見よ、私は新しい天と地を創造する」(イザヤ65・17)と、神は厳かに宣言なさいませ。新年とは、創造主なる

神が新しく創造してくださる一年に他なりません。そして、私自身も、このすばらしい創造のみに参加させていただけなのです。だからお互いに「おめでとう」と大きな期待を込めて挨拶を交わすことができるのです。「たとえ私たちの『外なる人』は衰えていくとしても、私たちの『内なる人』は日々新たにされていきます。」(2コリント4・16)とパウロは励ましてくれます。私たちには、滅びる体を持つ古い人間と、キリストに結ばれた霊的に新しい人間が同居しているのです。ですから、自分の中にまだ残っている古い人間(ローマ6・6参照)に死んで、つまり罪から解放されて、新しい命を生きていくことができるのです。「私たちは皆、信仰によって、また、神の子を深く知ることによって、一つになり、成熟した大人、すなわち、キリストのうちに満ちているもので満たされて、

(次ページに続く)

# 迫害に打ち勝った先達を偲んで

## 記念碑の祝別・除幕式

11月3日(月・文化の日)第13回二本松キリシタン殉教祭並びに殉教碑除幕式が二本松教会で行われた。

### 二本松キリシタン殉教祭

溝部脩司教はじめ10名の神父の他、県内外から130名の方々が参加した。



記念講演で溝部司教は、長崎に始まったキリシタン迫害が東北地方へも及び、厳しい取り締まりの中でいかに布教し、信仰を守り殉教していったかについて話された。さらに、ローマ教皇パウロ五世のジュビレヨ教書と慰問文に対する感謝の奉答文に二本松殉教者も署名している。長崎の奉答文にはヨハネ町田宗賀、奥羽の奉答文にはバレンチノ中牧主水が署名している。

その後、14名の殉教者を記念した碑が祝別され除幕された。当初は、殉教地である供中

(ともなか)で、殉教の日である2月8日に近い日を選び小雪の降る中、阿武隈川の川の音風の音を聞きながら殉教者を偲びミサをしていたが、この処刑場の辺りが大雨による洪水にたびたび遭い、地域の区画整備と重なって昔の面影が全く見られなくなった。

そこで、この度教会の敷地に殉教碑を建立することとなった。いのちをかけて信仰を証した殉教者を顕彰し共に心を

ひとつにして祈りのときを過ごした。

小さな教会ながらも歴史を礎とする殉教者の取り次ぎにより神の光の中を歩むことを決意させられた殉教祭であった。

(二本松教会・花房)

### 司教霊名のお祝い

仙台教区司祭研修会

12月1日から2日にかけて、

教区センターを会場に仙台教区で働く司祭たちの研修会が開かれた。総勢40人の司祭たちが教区各地から集まり、一日目には、吉永馨先生(内科医・財団法人宮城県成人病予防協会会長・バプテ

スト教会信徒)を講師に迎え、「生と死を見つめて臨床医50年の経験から」と題した講話を聞いた。臨床医として多くの病める



方々や死に逝く方々に関わった経験から、特にクリスチャンの方々が病気や死との闘いで信仰による治癒力を神からいただいている姿に感動されたことを話された。

その日の午後6時から、ブラジル料理のレストランで、司教様の霊名のお祝いと、金祝を迎えたエンデルレ師(遠野・釜石教会)とエノ師(黒石・五所川原教会)の祝賀晩餐会が開かれ、楽しく盛り上がった。

二日目は「司祭不在の主日の集会祭儀」について話し合いをした。その後、小聖堂で全員が司教主司式で共同司式ミサが聖フランシスコ・ザビエルの取り次ぎを願って捧げられた。説教では、司教が、

教区全体に必要な内的刷新を軸に取り組むべき課題について説明した。二日間の有意義な研修を終え、皆はそれぞれ感謝のうちに帰途についた。

その背たけいっぱいには達するようになるのです。」(エフェソ4・13)信仰共同体である教会は、今年もまた信仰において成長していくのです。それは、必ずしも信者の数の増加を意味していません。むしろ、霊的な質の向上でしょうか。霊的に成長し続けるために、信仰の糧がなくてはなりません。「あなた方がわたしの内に留まっており、わたしの言葉が、あなたたちの内に留まっているならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。」(ヨハネ15・7)信仰の糧は、日々いただける「いのちのパン」(ご聖体)と「いのちのことば」です。だからキリストに結ばれて、みことばを噛み砕いて自分の血とし肉としながら、今年も信仰において成長できるのです。(博)



# 「新たな飛躍を目指して！」

## 聖ドミニコ学院創立50周年

聖ドミニコ学院は、1953年に創立されたから、50周年を迎え、感謝の記念式典が、去る10月25日(土)仙台市青葉区の国際センターを会場に、溝部脩司教をはじめ、県・市・私学関係者を迎え、職員・旧職員・同窓生・園児・児童・生徒約100名の出席のもとに行われた。

### さあ 架けよう！愛と真理の架け橋を

と期待、そして心からの援助によってこの日を迎えられたことを感謝しています。在校生は『地の塩』に、よい味付けをする最善の塩となるようにとつとめていかなければならない。大人になったときにまわりの人たちが、あなたの隣でよかったと思うような人に、幸



せにしてくれる人を待っているのではなくて、一人一人だれかを幸せにしてうれしいと思

う人になるように」と述べた。

溝部司教からは式典の中で朗読されたマタイ福音書第5章の「地の塩、世の光」とその後の部分が説かれ、「貧しい人であること、すなわち謙虚な人であること、神の前に頭を下げることに、人々の中であって豊かさをもたらす人であること、現代社会の好ましくないことに

あつては鋭意挑戦し警鐘を鳴らす人であること、そして柔軟に豊かに創造性をもって生きること、この50年間、学院は聖ドミニコにならうとしてそのように教育してきた。そのことに敬意を表するとともに、その学院の理想や信念を継承しながら、新しい50年に向かってますます発展していくことを願う

### カトリック学校校長会

#### 小中高連盟黙想会

去る11月29日(土)・30日(日)に仙台市青葉区青野木のドミニコの家で東北地区カトリック学校の校長先生方の黙想会が行われた。時はまさに少子化と経済疲弊による学校経営の困難の中で、国民的なのねりの教育改革の波により、一層の特色の顕在化が求められる時代である。そのような環境下、日本の福音宣教の最前線の一つであるカトリック学校の校長が、教育に対する社会の需要に心えながら学校の福音化を推進するために、溝部脩司教の講話と黙想、分かち合い

いる」と、祝いと励ましの言葉があった。そのあと、幼稚園児・小学生・高校生がひとつになつて演技や歌が披露され、荘厳な中にもほのぼのとした雰囲気で会場が包まれた。式典が続いて、和やかな祝賀会が行われ、お互いに50年の歴史を振り返り、新しい一歩を踏み出す覚悟を誓い合った。学院

を通して学び合った。特に種々の課題の多い東北のカトリック学校が共有しあう困難を支え合つて越えてゆき、人々の中に神の御旨を実現するために若い心を育むための、知恵と力を与えられる黙想会となつたことに感謝している。『目覚めて聞く』この時代の社会的な必要を説かれた司教様のお言葉を黙想し、分かち合う中に、この黙想会が時の流れの必然として行われた主の導きそのものであることを実感しながら、豊かな恵みへの感謝のうちに、ドミニコの家を後にした。

(連盟会長 佐藤 大)

50年の節目にあつて、「さあ架けよう！愛と真理の架け橋を」のスローガンを掲げているが、学院は今後さらに国際社会の中で真に必要とされるカトリック精神に基づく学び舎として飛躍していくことが期待される。

### カテドラル



カテドラルの正面大聖堂入り口の12月にな

るとクリスマスシンボルとなる絵が掛けられ、夜にはライトアップされて、市民の目にもクリスマスに近いことを告げていた。

昨年までは、ご降誕のステンドグラスの写真であったが、今年からこの絵も新しい物に取り替えられた。(1p・写真) 描かれているのは、「羊飼いの礼拝」作者はブルクスマイヤー・でドイツ・ハンスでアウスブルグ美術館所蔵のもの。 前回までのものは8年間も使われ、老朽化したために新しい物と取り替えたとのこと。

# いのちの声を聴く

## 「JCNのもったケアに努めよう」

日本カトリック看護協会（JCN）の全国大会が、去る10月17日、18日、約130名の参加をえて仙台市青葉区の江陽グランドホテルで開催された。

第1日目、開会式は、

マリア像を囲みローソクに点灯、荘厳な雰囲気の中で始まった。

開会にあたり、水野しづ会長は、「ニコニコ笑いながら、二日間

の出会いを大切に過ごして欲しい。看護というものは、『心と心の対話』が必要な仕事である。現代にあつて命の尊さを考え直し看護の原点に立ち返る必要性がある」と挨拶した。

開会式のあと、溝部脩司教による『いのちの声を聴く』と題しての講話が行われた。

司教は、この問題を次の三つの視点から話された。

1 聖書が伝える命のメッセージ

「愛こそいのちの基本である」、神とい

りを自分のものとして祈り行動する。それが看護です。」を引用して講演を結んだ渡辺千代さんは、光ヶ丘スperlマン病院その後シンポジウムでは、三人の話題提供者がそれぞれの立場から看護の大切さについて話された。



開会式の様子

まず、家族の立場から、芳賀

ヒロ子さん（北仙台教会所属・岩切病院医療相談員）は病人を抱えたそれぞれ

の家族が、「何をどうしたらいいの」と苦しんでいる姿の数々を

紹介し、医療と福祉の連携を通して家族の不安

や状況を理解することの大切さを話された。

第2の話題提供者、高戸仁郎

さんは、患者の立場から話された。氏は少年時代再生不良性貧

血の診断を受け、3年前、31歳の時、骨髄移植を行い、現在東北

北文化学園大学保健福祉学部講師として健康科学・体育実技

を担当、研究生活を送っている。氏は自分の病気の体験から、

死に直面した際の『いのちの』9時から佐々木博神父の主司式のも

と7名の大会参加司祭による共同司式でミサが捧げられた。

直に話が出来る相手を得ることが必要であると話した。

の看護師長として、ホスピスの看護に携わっている立場から

話題提供。患者の「こころの声」に対する看護師の役割は、患者

家族が十分に気持ち表現できるように援助する。小さなことにも耳を傾け、

希望を支える。患者の代弁者として、家族、医療者間の橋渡しをする。逃げ出さないで、最後まで関わり通すことの大切さを強調された。

これら三人の発表をもとに、それぞれのシンポジストと意見を交換するとともに、その後のグループワークで、札幌から鹿児島までの参加者たちが16のグループに分かれて、いのちの声を「聴く」ことについて話し合い、一日目を終えた。

傾聴のプロとして、何を、どのようにして聴くことが大切か、またスピリチュアルケアの本質についてご自身の経験を通して築いた理論をもとにわかりやすく話された。午後からは、同氏の指導のもとにグループに分かれての「傾聴」の演習を行った。

大会は、一人ひとりに多くの実りをもたらす閉会した。



シンポジウムの様子

ミサの後、東海大学健康科学部教授村田久行氏が『聴く』ということの援助的意味』と題して講演を行った。

看護職は人を援助するプロフェッショナルである。専門家としての「聴く」達人にならないければならない。聴く態度として大切なことは、「理解」「協調」「共感」である。

患者は、話すことで、「気持ち」が落ち着く、「考えを整理する」「生きる力が湧いてくる」というプロセスで癒されていく。「わかってもらえた」ということで元気になれる。

大会は、一人ひとりに多くの実りをもたらす閉会した。

# 青森明の星短期大学創立40周年

学校法人明の星学園・青森明の星短期大学は創立40周年を迎えた。このことを記念して去る、11月1日(土)午前10時より本学園、明の星ホールにおいて記念式典「写真」が挙行された。

たスライドで40年の出来事をふり返った。180名を超える参加者は、忘れかけていた記憶をよみがえらせて懐かしそうに見入っていた。

なお、式典に先立ち、記念講演会、記念コンサートを開催した。記念講演会は10月31日(金)午後3時より、本学ジムナイズにおいて、本学客員教授国分康孝氏により「生き方教育としての進路指導」と題して行われた。



会場は招待した教育委員会の指導主事、県内大学、高校教員、市内小中学校の教員により満席の盛況であった。

創立40周年記念事業協賛会長成田ナカ氏より記念事業目録(学生駐車場)が贈呈された。

式典の最後は、音楽科学生により祝歌「グロリア」が合唱された。学生の熱唱は参加者に感動を与えた。

式典の後、午後1時より、ホテル青森にて祝賀会が開催された。祝宴の途中、「大学案内に見る40年の歩み」と題し

記念コンサートは、同日、午後6時より明の星ホールにおいて行われ、本学教員、卒業生などが、ピアノ、声楽、打楽器の演奏をそれぞれ披露した。聴衆からは、「毎年開催して欲しい」との要望が出されるほどすばらしいコンサートであった。

今回の一連の行事で、教職員・学生の一丸となった取り組みは本学教育に対して地域の方々に、より一層のご理解をいただき、今後の学生募集・定員確保にも生きるものと思われる。

## ベルギーでの少年時代の思い出

村首ステファノ神父  
子どもの頃のクリスマス

父と母と六人の子どもの家族が全員そろって、毎晩、夕の祈りをしていました。待降節になると、馬小屋が飾られ、夕の祈りはその前で祈っていました。クリスマス・ツリーもありましたが、中心はなんと

この馬小屋は、だいぶ大きなもので、毎年、待降節になると飾られるものです。しかし、羊飼いや羊、馬や牛などはありませんが、まだ馬小屋の中には、マリア様もヨゼフ様もイエス様の姿もありません。

クリスマスの一週間前になると、マリア様とヨゼフ様が馬小屋の中に入れられます。そうすると、クリスマスが近づいたことが感じられ、一生懸命祈ったものです。

すると、クリスマスが近づいたことが感じられ、一生懸命祈ったものです。

クリスマスは、3日前からは、夕の祈りのとき、線香花火を一本ずつもって、それに火をつけて祈っていました。線香花火は、チカチカと光り、星の輝きのようでした。これは、「世の光」としてこの世に來られるイエス様をお迎えする、とてもよい準備となっていました。この祈りは、クリスマスの後3日間つづきました。ですから、クリスマスを入れる、前後3日間、



帰ってから、お菓子とココアをいただきました。翌日は、昼食がごちそうでした。これは、ベルギーの習慣だったと思いますが、我が家でも、身よりのないお年寄りや、経済的に困っている人を昼食に招待し、一緒に食卓を囲みました。この人々は、二、三年同じ人が続くこともありませんでしたが、また、別の人もありました。

日本では、クリスマスというと、子どもたちはプレゼントをもらう日という印象が強いと思いますが、ベルギーでは、クリスマスにプレゼントはいっさいありません。では、いつ、子どもたちはプレゼントをもらうのかといえば、12月6日、そう聖ニコラスの祝日に贈り物をもたらすのです。

7日間だけの、我が家のクリスマスの特別な夕の祈りでした。クリスマスになると、馬小屋にイエス様が入ります。夕の祈りが終わり、クリスマスは、子どもたちはいつもより早く寝かされました。真夜中のミサは、12時から始まります。その前に起こされ、家族そろって教会に行きました。

私は何かほしいとき両親に頼むのですが、「聖ニコラスに頼んで」と言っていました。それで、聖ニコラスの祝日の二、三ヶ月前から、きょうだいでほしいもののリストを作ったのです。それはそれは真剣でした。ある時はリストが長くなりすぎて、弟や姉のリストに自分のほしものを加えてもらったこともありました。楽しい思い出です。(写真は村首師の少年時代)

# 創立50周年を迎えた幼稚園

## 小百合幼稚園（宮古）・石巻カトリック幼稚園

### ～地域の人々に支えられて～小百合幼稚園

昭和28年9月、ベトナム国外宣教会により創立された小百合幼稚園（宮古市宮町一丁目・佐々木国雄園長）は今年50周年を迎え、この11月8日に式典と祝賀会が行われた。式典は年長組の子ども達による園歌で始まり、ホールいっばい元気な歌声が響き渡った。祝



に感謝しましょう」と述べ50年という歴史と地域の人々に支えられているという事に感謝した。また、スイスに帰られた歴代の園長先生方から寄せられた「遠く離れていても皆さんと一緒にいます。そしていつまでも小百合幼稚園の為に祈っています」という暖かいメッセージに、懐かしさと嬉しさから胸が熱くな

辞の中でベトナム会地区長アントニオ・ツゲル神父は、「この地に幼稚園がほしい、創りたい」といった人々の熱い思いが今も綿々と受け継がれ、こうして50年を迎えられたことは、大変ありがたく、あらためてその人々に、皆さんと一緒に

るのを感じた参加者も多かった。

午後の祝賀会は浄土ヶ浜パークホテルで和やかな雰囲気の中で行われた。無事に式典が終わり、参列された方々に喜んでいただけたことを神と、祈ってくださいました方々にあらため

て職員一同感謝している。

（斉藤絹子）

### 石巻カトリック幼稚園～実りの時を信じながら～

創立50周年を迎えて石巻カトリック幼稚園

園長 斎藤 潤子  
今から50年前の昭和28年、港町石巻にとつて初めて

の私立幼稚園として蒔かれた一粒の種が、ここまですで成長しました。

教会の歴史から見れば、幼稚園の50年という歴史は決して長いものとはいえませんが過ぎ去ったときの流れの中には、忘れられない出来事や多くの人々がありました。しかし、どのようなこともすべて神様の



幼稚園関係者だけでなく、市内の私立幼稚園や一般の人々も参加した記念行事『アフリカの風コンサート』を開催いたしました。

人間形成の基となる大切な幼児期に、人間関係を異年齢学級編成と年齢別活動で経験させ、

また、幼児一人一人を大切にチーム保育を行うなど、少子化が進み厳しい幼児教育界の動向の中でも、与えられた使命を忘れずにさらに歩みつづけていってほしいと思っております。

人それぞれに蒔かれた一粒の種の実りの時を信じながら...



**<シリーズ>  
188名日本殉教者列福の推進  
米沢の殉教者  
甘粕右衛門ルイスとその仲間  
溝部 脩**

米沢地方には、イエズス会とフランススコアの司祭が働いていて、3千人余りの信者がいた。米沢教会の中心人物は甘粕右衛門

ルイスであった。甘粕家は上杉譜代の家臣であり、上杉会津移封の際には右衛門の父は白石城主であった。ルイスは談義者と呼ばれ、米沢の共同体の責任者であった。1624年上杉景勝が死亡するまでは、上杉藩は目立った迫害を行うことはなかった。しかし、景勝死亡を機に、幕府は圧力を若い定勝に加え、右衛門とその仲間を逮捕せざるを得なくなった。1629年1月12日から13日にかけてのこと、右衛門とその仲間は逮捕され、北山原刑場において斬首、殉教した。彼らの血は雪に埋もれていた刑場を赤く染めた。



北山原殉教跡地

# 各地から

## 青森 鮫町教会

青森県の南東に

位置する八戸市には塩町と鮫町の二カ所に教会がある。

戦前に建てられた塩町教会に次ぎ1953年にジョリコール神父様によって創立された鮫町教会は、昨年50



周年を迎えた。写真「ごたぶんに漏れずわが教会も、少子高齢化社会の縮図のような様相を呈していたが、どうしたわけか近年は出産ブームで、ここ数年お聖堂には赤ん坊の泣き声が絶えない。通常の主日ミサの出席者数は20名前後であるが、

間足らず、世間話に花が咲く。人間関係が希薄になりつつある現代社会においてこのよう

な分がち合いの場は貴重である。50周年を記念して教会の傷んだ外壁と屋根を改修した。縁のある神父様や信徒から多くの寄付を頂き実現した工事である。冬が

### 宮城 東仙台教会

終わる頃、小さな50周年記念誌も発刊されているであろう。

東仙台教会は、毎年ファチマの聖母の日（10月の第三日曜日）にチャリティバザーを行っており、今年は10月19日（日）に開催いたしました。写真＝

開催に先立ち、日用雑貨などのご寄付の協力、食券販売、北海



道産ジャガイモの予約販売を行いました。

当日はよい天気恵まれ、地域の方々にもおいでいただき盛大に始まりました。食堂のウイター・ウエイトレスには、ボーイスカウト・ガールスカウトの小学生クラスの子ども達に務めてもらい、楽しく活動している姿や、各売り場でのみんなの生き生きとした姿には感銘を受けました。

地域でのイベントと重なっていたせいか、例年より人手がまばらになってしまいました。が、それでも77万円程の収益があげられました。これも神様のお恵みと感謝の気持ちでいっぱいです。

この収益金は、スベルマン病院増改築資金・ラサールホーム建設の支援金・バングラデシュの子ども達のために・正平協で行っている炊き出しへの支援金・ダルクへの支援金に配分させていただきま

した。これからも皆様方の温かいご支援を願っております。

バザーが終わった11月2日（日）にはカトリック鶴ヶ谷墓地での共同墓参、墓地清掃には、墓地委員会よりの要請で婦人会の協力を得て芋の子汁を作り参加された皆様に味わっていただきました。お味は如何だったでしょうか。

11月16日（日）には、信徒の集いとして会津若松教会への巡礼に行き、板垣神父にごミサを捧げていただき、殉教地としてのお話を聞きました。（伊藤）

### 福島 勿来教会

いわき市の南端、茨城県境に程近い所に



勿来教会はありません。主任司祭は小名浜教会と兼任のモレン神父。月二回（第一・第三日曜日）のミサには10名程の信者が集まり、心一つにして祈りを捧げています。毎月第二金曜日には信徒会の集まりがあり、聖堂掃除の後、口ザリオの祈りを皆で唱え、聖

歌の練習をします。その後は持ち寄りのおかずを広げて楽しい昼食会です。この昼食会にはモレン神父も時々参加されます。また、毎年夏休みには、併設の幼稚園の先生方と一緒に、知的障害者授産施設「なこそ授産所」の入所生を招待して、ふれあいの会を行っています。ゲームをしたり、踊りを踊ったり、私たちの手作りカレーを食べたりして一日を過ごします。

私たちの教会も高齢化が進み、思うように活動できなくなっています。互いに支え合い、一致協力

して信仰の灯火をともし続けたいと思っております。今年2003年のクリスマスは、高齢の神父様のご負担を考え、小名浜教会と合同ミサを行います。二つの教会の信徒たちの喜びの歌声が小名浜の聖堂に高らかに響くことを楽しみにしています。（一ノ瀬）

# 活動紹介

ボランティアの会

(元寺小路教会)

代表 松岡 敏子

「何か手助けしたい」あるいは「声をかけてほしい。手を貸してほしい」。そのような窓口を開いてから8年目となります。ボランティアは英語でボランティアのことです。この会は『神の愛のもと、主に教会共同体の中で相互の理解と信頼とによって、隣人の愛を育み、援助し活動することを目的とす

る」ものです。

会の活動は大きく三つに分



## 私の気分転換

一本杉教会 小田島 佳子

老親の介護、家族の看病を長い間続けてきた。ある時、もうがんばれなくなつた。下の二人の子は小学生だった。ギアチェンジしたい。一番やりたいことをしよう、大学に入学して思う存分勉強したい。元気になれた。25年間、夫と続けてきたことがある。年一回は、エンカウンターで奉仕すること。私は妻でも母でもない個の私に戻

る。日々の重荷をおろし、私は私と出会う。自分を抱きしめる。

日常の気分転換は描くこと。

木の実や菜や草の花を鉛筆デッサンする。週の終わりに家族と林や森を歩く。幼児期を北海道で育つた私は、心の中に森を持つ。森の記憶は原風景である。どこに転動してもその地にマザーフォレストを探し出す。そして歩く。生きる力を木々から受け取る。

## 修道院紹介

製作しているところ。

青森聖母園マリア院

通称「マリア院」と呼ばれる

私たちの会は、正式には「殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会」といい、1869年北ドイツの小さな村チュイネに、病人の看護と孤児の世話のために誕生しました。極貧のス

かれ、その内容として、一、《資金、物資の援助》各種販売(含委託販売)の益金のもとに国内外への資金援助および衣料品などの物資の援助、あるいは白鳥会(低肺者団体)の手伝い、車椅子の買物介助等々。二、《訪問、慰問》一人暮らし、入院暮らしの高齢者への電話、訪問、慰問、文通および教会の敬老会欠席者へ届け物配達、慰問三、《資源再利用》使用済み切手、テレホンカード収集、古布の回収(切り揃えて病院へ)等



マリア院で行われたマリア祭

です。現在会員は25名で毎月初金ミサ後定例会を開いています。写真は手作りハンガー(訪問・慰問先へのプレゼント)を

ターゲットでしたので、アッシジの聖フランシスコの会憲を戴きました。また、創立以来特別イエスの聖心を崇敬しております。日本でのミッションは、北海

道のキノルド司教様に招かれ、1920年に「札幌藤高等女学校」の礎を築いたのが始まりです。

その後、再び世界大戦の惨禍も経験しましたが、邦人のシスターも順調に増え、1946年には、戦後の引き揚げや爆撃で親を失った孤児達の世話を引き受け、「青森藤聖母園」を創設し、日本でも社会福祉事業を開始することができました。総本部をドイツに、管区をド

## 文芸

《短歌》

一本杉教会 成毛一雄

ゆったりと妻が添寝の児に読める童話は愛に満たされてい

(Sr・木立)



## 【編集部から】

皆様、新年おめでとございます。今年から教区報は奇数月の第1日曜日に発行することにいたしました。

教区の皆様からの投稿をお待ちしております。記事・随想・文芸等どうぞ、原稿をお寄せください。